

# 西光寺だより

第五十七号 平成二七年五月一日発行

新緑の若葉が繁れる季節を迎えました。五月の若葉はいつもはつと  
するほど眩しく輝き、心地よい初夏の訪れを感じさせてくれます。

こんな気持ちの良い季節は、自然の中に出かけ思い切り深呼吸した  
くなりますね。

自然の息吹をいただくように大きく呼吸すると、身体の細胞ひとつ  
ひとつが喜んでいられるように感じることが出来ます。私たちは普段あま  
り気にしていませんが、この手や足も、目、耳、鼻や口も、私たちが  
毎日を過ごせるよう毎日働いてくれています。たまには伸び伸びと開  
放してあげたいですね。

大地に寝ころび、五月晴れの空に向かって思い切り伸びびをしてみる。  
土の感触、草の匂い、風の気持ち良さ、お日様のぬくもり、青い空を  
ゆく雲の流れ。自然の力は、私たちの身体も心もゆっくりとほぐして  
くれます。そして、知らず知らずに固くなっていた自分自身にも気付  
かせてくれることと思います。

全身で色々なことを受けとめ感じていた子供の頃、世界は常に変化  
し毎日が発見の連続でした。大人になるにつれ物事を分かったように  
思ってしまったのですが、実はひと所に固まってしまっただけなの  
かもしれません。

「諸行無常」とは「この世のすべては常に変化し続けており、同じ  
ままとどまることはない」という仏教の教えですが、幼子のほうがこ  
のことをずつとよく知っているように思います。そしてその変化がど  
のようなことであつても受け入れることが出来ているとも。

大人になった私たちですが、せっかくのこの気持ちのよい季節、身  
体も心も深呼吸してみませんか。自然はありのままに私たちを受け止  
め、きつと子供の頃のような素直な気持ちにさせてくれることと思  
います。どんな変化をも受け入れられる素直な気持ちに・・・。



## ◆先月の報告◆

四月五日(日) 西光寺本堂にて、永代経開關法要ならびに春季永代  
経法要を厳修致しました。この度、開關法要のご縁をいただきました  
施主の岡田高良様より、貴重なご懇志を賜り、皆様と共に焼香をさ  
せていただきました。引き続き春季永代経法要、二時〇分説阿弥陀経、  
七時〇分正信偈・行譜・六首引のお勤めをさせていただきます、今は亡き先  
人を偲ばせて頂きながら、これからも永代にわたつてこの西光寺が続  
いていくように思いを寄せる時間を過ごさせていただきます。

また本願寺派布教使 宮部誓雅 師(撰津市 誓覚寺住職)による  
ご法話を皆様と聴聞いたしました。

親鸞聖人のお言葉をいただき、ご自身の経験から様々なお話をし  
ていただき楽しく心地よい時間を過ごすことが出来ました。本当にあり  
がとうございました。皆様からも良かったというお声を頂戴しました  
ので、秋季永代経法要にも来ていただくことになりました。どうぞよ  
ろしくお願い申し上げます。

\*聴聞と開關法要の説明は二枚目にあります。



永代経開關法要とご法話を皆さんで聴聞。



「ご法話を聞く時、皆さん一緒に聴聞（ちようもん）致しましょうと言います。その『聴聞』とは一体どういうことなのでしょう。この度の茨木東組の連続研修会においても、このことが議題にあったので書かせていただきます。

浄土真宗のご法義は「聴く」ことであり「聞く」ことである、といわれています。「人生は聴聞を続けることで広く深くなる」という法語があります。

聴聞とは仏法を聞くことです。すなわちお念佛の教えに自分の人生を照らしあわせ、阿弥陀さまの願いに我が身をたずねていくことです。では聴聞を続けることで人生が広く深くなるのはどのようなことでしょうか。それは自分のものさしではなく、仏さまのものさしを頂戴するということ。そのことによって自己中心性の自分に目覚め、もっと広く深い仏さまの願い（思い）に気付かされていくことであります。

仏さまの願い（思い）を聴聞するということは、自分のものさしは不完全であるということ、そしてその不完全である我が身の愚かさに気付いていくことによって、もっと大きな世界があることに目覚めていくことの大切さにうなずいていくということです。

それを重ねることで、自らの心のなかで「味わい」となっていくわけです。これを「聴聞」というのです。「聴」は大きく意志があつて注意して大きく、という意味になります。また「聞」は自然にきこえてくる、という意味なのです。自分自身が仏法を聞こうと耳を傾けるとともに、自然と心にも聞こえてくる、ということなのです。どちらも「耳」という字がはいっています。

親鸞聖人の「聖」の字の中にも「耳」という字がはいっています。「知徳の最もすぐれた人、耳がよくとおつて、さまざまな声を聞き取ることのできる人」となっております。聞くことに長じている人のことなのです。さらに「住職」の「職」の字の中にも「耳」の字がはいっています。これには「細かな事まで耳につけてよく聞きしるすこと」となっています。仏さまの近くに住み込んでこれをつとめるのが「住職」なのです。

私自身、耳を傾けられる住職になれるよう日々精進したいと思えます。

《仏教コラムより》

永代経とは、永代読経（えいたいどつきよう）の略で「末永く（永代に）お経が読まれる」という意味であります。そこからまた「お寺が存続し、み教えが繁盛し続けるように」という願いが込められた意味にもなります。

そしてこの度の永代経開闢（かいびやく）法要。私達は、お念仏に生きる者であります。阿弥陀様のお慈悲に懷かれて人生を送りつつ、今生の縁つきるときに、浄土の世界に往生するのであります。そのお心（こころ）をしつかりと持つていただくのが開闢（かいびやく）法要です。

亡くなられた方をご縁に、いのちを恵まれた親族によって、お寺に懇志を進納することにより、「永代にみ教えが伝わるように」、「永代にわたつてお経が読経されるように」との意志を受けた施主が、故人になり代わつて納めさせていただくことであります。

その主旨は、お寺が立派に護持され、お念仏のみ教えが永代に受け継がれていくようにとの願いと、私たちがお念仏をよりどころに、人間に生まれ、生かされて、生きる幸せに感謝の心をあらわすことでもあります。

その心は、やがて子や孫に受け継がれ、永代経法要を通じて、み教えを聞き広め、伝えるご縁となります。

私に伝えて下さったご先祖の遺徳を偲（しの）び、何より私自身が聞法に励んで、ご法義を大切に思うこそ永代経といえるのであります。

あらためて、故人の面影を偲びつつ、感謝申し上げます、心（こころ）からお香と花をたむけて法要を勤めさせいただき、お念仏申したいと思えます。

合掌

浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一七二二

電話 〇七二一六二二一四七九四

FAX 〇七二一六二二一九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>